

『新しい学校』一九五五年十月（興文館）

教科書は正しく使われているか

矢口 新

(一)

ここ二十年の間、教科書学習が批判されつづけて来た。併しそれにも拘らず現実においては、教科書は依然として重要な、否、学習において中心的な位置を占めている。それは一体どういうことを物語るものであるうか。

教科書学習ということが批判された時、合言葉のようにいわれたのは、教科書は参考書のように使えということであった。この言葉は、参考書は使っても使わなくてもよいものであるから、教科書も使っても、使わなくてもよいものだと考えてよいのだという誤解を生み出したのである。教科書を使わないで、無手勝流で学習をする先生が飛び出したのである。そうしてそれが教科書学習を克服したことだと思ひこんでいた。

成る程、本質的にいえば、何も、教科書という形のものがないとしても、学習は行えるのである。併し、それは、学習する場面に先生と生徒が居れば、それでよいということでない。先生が生徒に話して聞かせる、それで学習が成立つということではない。それも成る程学習場面とし

て考えられるにちがいないが、それで子供が本当に学習したことになるかどうかは問題である。先生が話して聞かせることを生徒はどれだけ聞いているか。聞いていないかも知れない。いい気持になって先生は話しているかも知れないが、そのしゃべっている内容が、教科書より気がきいていて、余程能率的だとはいえないであろう。むしろその反対であるといった方が正しいであろう。こういう形の教科書学習の排斥なら、教科書学習の方がまだましだという人は多いであろう。

先生と生徒が、また生徒同士が話し合っていく学習が大に行われている。そういう形でいろいろと問題を解明していくということである。ここに子供がつかんで行くことが、教科書より明確に、正しく、能率的であるといえようか。本当に学習したことになるであろうか、ただわけもわからない事をしゃべりあっただけに終るのであるまいか。子供がそんなにはつきりした考えをもっている筈がないから、ただ漫然と話し合ったにとどまるのでないだろうか。先生も教科書よりすぐれた考えをもち教科書よりはるかに内容豊富な知識をもっているとは考えられないから、そうなる、教科書を使わない、話し合いが教科書学習よりすぐれているとは思えない。こういう形の教科書学習の克服ならばまだしも、教科書学習の方がまだましと言う人は多いのではないだろうか。

教科書学習は教科書を無にすることはあるまい。たとえそれがつたない編集方法でつくられ、資本主義的な機構の中で、理想からははるかに遠いとしても、それでも、それなりに様々の衆知をあつめ、多くの人の知恵がそそぎこまれ、様々な技術が使用されているのである。それをそのままふりすてることではないと思う。われわれは、もっとこれを使うことを考え、もっと積極的に利用することを考えなければ

なるまい。

教科書という形のもがなくても、学習は行えるかも知れないが、学習に、何等かの教材がなくては行えるものではない。先生と生徒の問答であつても、その間には、耳から聞いてすぐ消え去つてしまふ形の言葉による教材が提出されているのである。凡そ人間が学習によつて成長するということは、そこに提出された教材に対して正しく反応出来るようになるということである。例えば文章がある。それがよめるようになることは成長である。同じような文章が出て来れば、この次からはもう読めるのである。その成長に対して、文章は媒介物としての役割を果したわけである。自然の現象をみて、これはかくかくの現象であると理解する。次の機会にその現象にぶつかればそれがどうしてそうなたかをちゃんと見分けることが出来る。それは学習したことであるが、その学習に対してはじめに見られた自然の現象は媒介物、即ち教材としての役目を果しているのである。凡そ教材という媒介物が無い所に学習ははじまらない。

われわれの仕事は、最も適切な教材を最も適当な場合に提出することであろう。教科書にとらわれなくてもよいが、適切な教材を利用することは積極的に考えなければならぬのである。教科書は、そういう教材の中のある一定の構成をもつた、一定の表現形態をもつた教材なのである。だから教材を利用しない学習などというものは考えられないということが正しいならば、教科書を利用しない学習というものも考えられないと言つてよいのである。何故なら、教科書は、ともかく教育的に工夫され、様々な社会のエネルギーがそれなりに結集して作られた唯一とはいえなくとも、第一にあげられてよい教材ではないか。これを使わないということになつてはもはや他に使うものがない。

教師は自殺することになるのではないか。

(11)

教科書と一口に言つても、内容はちがうのである。形は成程同じようであるが、国語の教科書の中味と社会科の教科書の中味とは、その教材としての意味がまるでちがうのである。この教材としての意味がそれぞれ考えられているであろうか。教科書学習を批判する立場でも、その辺の所は怪しいものがある。また教科書を後生大事に教えている教師も、そういうことをはつきり認識しているであろうか。教科書学習ということをめぐる、問題が起るのは、実はそこらに原因があるのである。文章を読む力を育てるためには、文章にぶつかつて読まなくてはならぬから、読む教材が必要になる。国語の教科書はそういう読む練習をする教材なのである。練習のための教材である。練習台であるといつてもよい。こういう練習台なしで、読む力をつけようとしても出来ないことはわかつてゐる。そうすれば、この練習台をフルに活用することを考えなくてはならぬ。練習台として使うことを考へるのが、その場合の正しい使い方である。

所が社会のことを説明してある社会科の教科書は、文章を読むための練習台ではない。社会はこれこれであるという知識が書かれてあるのである。それは社会の現象を整理した結果を言葉を使用して表現してあるのである。所で社会がわかるということ、社会を理解する力をもつということは、社会の現象を自分でみて整理することが出来るということである。そこで教科書に書かれてあることを読むということは、人が社会の現象を整理した結果にしたがつて、即ち教科書にしたがつて、整理するという活動をたどつてみるといふことである。恰も

画家が絵を練習するとき、すぐれた絵の模写をするという如き活動である。この場合、子供は、自分で社会をみて、社会を整理してみなければならぬ。その手本として教科書があるのである。これは、読む教材が練習台としての意味をもっているのは大いに異なる。この場合練習台となっているのは、社会そのもの、社会の現象そのものである。その整理の仕方の模範が教科書なのである。教科書だけが、ただ読まれているだけでは実はチンプンカンプンなのである。手本は一つの写生のようなものである。丁度リングゴを書いた絵があるが、それはこれを書いたものだという、もとになるリングゴと見比べてみる必要がある。この二つのものがあって、本当に描き方がわかるのである。

社会科学の教科書はだから、これをフルに利用するためには、社会の現象が教材として一緒にとりあげられなければならない。そういう使い方しなければ本当に使ったことにならないのである。

このように教科書を本当に使用するためには、教科書にもられた内容が、教材として、如何なる意義をもったものかを一一つ明らかにしなければならぬのである。

教科書にとらわれたり、教科書を徒らに否定するというのは、何れも教科書の教材が学習目標に対して如何なる意味をもったものであるかを十分に検討しないことから来ることである。教科書を利用することは、だから学習の目標とそれに必要な教材ということを本格的に考えなくては出来ないことである。逆にそういう本格的な把握がなされないから、教科書を利用出来ないし、徒らに否定し、あるいはただなんでも読んでいくだけだということになるのである。

かくて教科書を使うことが出来ないようなことでは、本来学習を正しく能率的に進めることが出来ないといつてよいであろう。教師は教

科書の使い方をもちと研究すべきであろう。つまり教材について本格的に研究すべきだということである。

(三)

教科書を使うことを考えるのは、教師の責任であるが、逆に教科書自体が使えるようにつくられているかどうかという問題がある。今つくられている教科書は、長い過去の伝統があつて一定の形のものに出来あがつている。われわれは、教科書の内容は大体そういうものだときめてしまつて別に不思議にも思わない。しかし、何も今ある形が、教科書として理想的であるということではないのである。むしろ情性に従つて、何となく認めているだけで大して理屈があるわけではない。

一例をあげると、こういうことである。先にも述べたように、国語や数学の教科書には、練習台としての教材があり、社会科学の教科書には手本としての教材がある。併し、社会科学の教科書が国語や数学の教科書のように練習台としての教材を内容としてもつことも出来るのである。つまり子供に見せるべき社会現象をのせておいて、教師と子供がそれを練習台にして、社会のことを整理して行くのである。社会について整理された知識、つまり社会現象についての解釈は教師と子供とで答として出すのである。恰も数学の練習問題をとくように、教師と子供がそれをとくのである。そういう形態の教科書だつて考えられないことはない。若しこういう教科書に、社会科学の教科書がなると、教科書をただ読んでいくということではいけないから、どうしても答を出す活動を子供がしなくてはならなくなる。そして教師は子供の出した答を正しいか正しくないか見分けてやることが主な仕事になる。国語や数学ではちゃんと行われているのであつて、それと同じように

社会についても、自然についてもそういうことが出来ないことはないのである。

そういう形になった方が教師が使いよいならば、社会科や理科の教科書はそういうでもよいわけである。むしろ本質的にはそうすべきなのではないか。ただそうなると別な問題が起る。数学や国語では、その練習教材についての解答を教師がちゃんと心得ているから教科書を使うことが出来るのである。そのように、社会や自然についても教師がちゃんと答を出すことが出来るようになっていくかという問題がある。ただ答が出せるということではなく、ちゃんとその理由が説明出来るということである。こういう問題は教師に対して失礼に当るかも知れない。しかし、本当の所どうであろうか。

社会や自然について、練習教材が出ていればそれで学習が出来るというのなら、これが教科書として最もよいあり方だと思ふ。そうすれば、抽象的な言葉で、社会や自然のことについて、説明した内容を教科書に出しておいて、その言葉だけを覚えるなどという、能率の悪い学習は行われなくなるのである。本当に教科書を使う学習が出来るようになるのである。

併し現実の学習をみると、教師は、教科書に書かれた言葉以上に子供に説明して聞かせることが出来ないでいる場合も多いのである。そういう状態では、とても、社会や自然についての具体的な現象をみて、それを自在に解釈して答を出すことは出来ない。つまり、社会や自然について、子供に読ませる今の教科書程度の知識しかもっていないのでは、練習教材をもった教科書を使うことは出来ない。そうなるどころまで教師が社会科学や自然科学についての知識をもっているかという問題になる。数学について答が出せるように、社会科学や

自然科学についての答が出せるようになっていくかということである。これは教師の基礎的教養の問題である。

教科書の内容の問題をどうするかと考えると、こういう問題にぶつかるといことは、中々重要な意味をもっている。というのは教科書の内容を、使う立場に立って、組みかえようとしてこの問題にぶつかったということは、教科書を使うようにするためには、教師の問題が重要な位置を占めているということである。ただ使うようにすべきだ、使われてはいけない、教科書学習はいけないといっても、それでは、解決にならないということである。使うことが出来る教科書を作る、それを使えるようになること、こういうことが具体的に考えられなければならないということである。

今の教科書は、読んで覚えるようになって居り、今の教師は、覚えさせるようにしか育てられていないのである。教科書が正しく使われないのは当然ではないか。それで教科書学習はいけないといえ、今度は、教科書を使わない学習になって、途方にくれてしまうのである。途方にくれないのは、お目出度い教師ではないか。